

いっしょ一緒 富山のペットたち

フィラリア症を「存じ」でしようか。「蚊に刺されてかかる病気」と言えばピンとくる方も多いでしょう。

フィラリア症は、フィラリアにかかっている蚊に刺されることで感染し、放っておくと死に至る大変恐ろしい病気です。しかし、きちんと薬を飲ませれば100%防げることが出来ます。



荒井 靖子

あらい犬猫病院長
(富山市婦中町下書田)

フィラリア症

犬の体内に入った寄生虫(線虫)、フィラリアは、血流に乗って心臓に到達し寄生します。血液循環障害を引き起こし、心臓や肺などにダメージを与えます。症状は感染してすぐに出るわけではなく、フィラリアの成長と寄生数、犬の年齢や体力によって、数カ月〜数年後に現れます。ですから、何か症状が出たときに、すぐにはフィラリア症と気付かないかもしれません。フィラリアの寄生数がごく少数であれば、目立った症状が現れることはありませんが、寄生数が50〜60匹にもなると、心臓にフィラリアが充満し、心臓か



フィラリア予防薬処方前の血液検査。処方感染していないことを確認してから始める—あらい犬猫病院

シーズン初めの投薬開始時には、前のシーズンに予防できていたか、血液検査で確認する必要があります。動物病院で血液検査をしてから予防薬の処方を受けましょう。

予防薬は体重によって用量が異なりますので、投薬開始時にきちんと体重を測って処方を受けなければなりません。特に、子犬は体重がどんどん増えますから、毎月測る必要があります。

予防薬は顆粒、錠剤、おやつ感覚で服用できるチュアブル、滴下剤があります。与えやすい

薬飲ませしっっかり駆除

ら全身へ十分な血液を送り出すことができません。血流が悪くなると、のどに何か引っ掛かったような「カッカッ」というせきが出るようになります。

せきは、最初は運動時に出る程度ですが、回数が多くなると、呼吸が荒くなって散歩中に立ち止まったり、散歩に行くのを嫌がるようになります。気温や気圧の変化によって激しくせき込んだり、散歩や運動中に失神して倒れてしまうこともありま

す。

血液循環障害が進むと、肝臓や腎臓に負担がかかり、体がやせたり、おなかに体液成分が多まります。肺や胸の中にも体液成分が多まり、呼吸困難が起こるほか、赤褐色の尿が特徴的な急性症状が現れたり、フィラリアの幼虫が目や脳、脊髄に入り込むこともあります。重症になると、全身の臓器の機能不全が起り、死亡するケースもあります。

フィラリア症の予防は、前月

にかかったかもしれないフィラリアを駆除するという、ちょっと変わった方法です。体内に入ったばかりのころは、比較的簡単に薬で駆除できます。

予防薬は、蚊が目につき始めて約1カ月後の5月ごろから、蚊を見掛けなくなつて約1カ月後の12月ごろまでの期間に毎月1回、与えます。シーズン最後の投薬を忘れると、それまで毎月予防薬を与えていても、フィラリアにかかり、翌春までにフィラリアが心臓に寄生してしま

ものを選びましょう。

フィラリアに感染した場合は、心臓に寄生したフィラリアが寿命で死ぬのを待つと同時に、新たなフィラリアに感染させないため、予防薬を2〜3年間、通年投与することで駆除します。急性フィラリア症ではフィラリアを取り出す手術をする場合があります。

フィラリア症はイヌ科動物に感染・寄生します。フェレットも犬と同様に予防しましょう。最近では猫への感染報告も増えていますので、十分に注意してください。

「いっしょ一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。